

在原業平における白居易詩の受容

—『古今集』における「雨中の藤花」の詠—

久保 瑞代

はじめに

『古今集』春下の巻末近くに位置する在原業平の和歌が白居易の詩を踏まえていることや、業平の他の春の歌にも白詩の影響が顕著であることについては、すでに多くの論がある¹⁾。本稿では、次の和歌が、従来指摘されている以上にたくさんさんの詩歌を受容して創作されていることについて考察したい。

やよひのつごもりの日、雨のふりけるに、ふちの花を
折りて人につかはしける 　　なりひらの朝臣

133 濡れつつぞしひて折りつる年の内に春はいくかもあらじと

思へば

業平が漢詩文を和歌に取り入れる場合、一つの和歌に複数の漢詩の表現や技巧・発想などを取り込み、しかも原典の訓読的な表現に終わるのではなく、大胆に翻案や組み替えを行う。また前代の『万葉集』に用いられていた歌語を用いて、それに新たな意味を付加するといった特徴があることをかつて述べた²⁾。このような前提で右の一首を読み直し、漢詩文受容の跡をたどりたい。また歌に詠み込まれている言葉の典故をどの漢詩文と見るかによって、和歌一首の解釈が大きく変わることもあわせて確認したい。

—「やよひのつごもり」と「春はいくかもあらじ」

業平の藤花の詠は、詞書に「やよひのつごもりの日」とあるにもかかわらず、歌中では「年の内に春はいくかもあらじと思へば」と歌っている。その点をどう説明するか、見解が分かれていた。

たとえば賀茂真淵は、

其頃までは月の末つかたをひろくつごもりといへりし故に、卅日の日よりまえのことなれども詞書きにはひろくつごもりといへり。
（『古今和歌集打聴』）

と、三月下旬の三十日以前のある日のことと解釈している。それに対して北村季吟は三月末日と捉え、次のように言う。

弥生のけふばかりなれば。春のわかれ。花のなごり。とりあつめたれば。ぬれつゝ花ををるは。心ざしのあさからぬよし也。わが衣手に雪はふりつゝ。とある同心也。雨とも藤ともいはず。ぬれつゝしるてをるとよめる。例の詞書きにゆづるなり。やよひのつごもりなれど。春はいくかもないへる。歌はかやうにある事なり。
（『古今榮華抄』）

近くは窪田空穂氏が次のように解説する。

「晦」を「幾日もあらじ」といつているのは、事実とは違って

いるが、耽美的気分から春の逝くのを惜しむ心をいうのが目的であるから、事実通りに言いきらず、諦めかねる心を残して、「幾日もあらじ」と大まかにいった方が、かえってあわれを現わし得るとしてのことだと考える。

〔新訂版 古今和歌集評釈〕

最近では小沢正夫氏・松田茂穂両氏が、「春はいくかも…」の句の前に「私にとって」を補ったうえで、

三月晦日になって「春はいくかもあらじ」というのはおかしいと言われるが、裏に作者の衰運を訴えている句なのである。業平が官位昇進を権門藤原氏に乞うて、藤の花を贈ったとする説もあるが、真相は明らかでない。

〔古今和歌集〕新編日本古典文学全集

と説明を加えている。これは「真相は明らかでない」と断ってはいるものの、『伊勢物語』八十段を強く意識した解釈と言えよう。

「末日」か「下旬のある日」という点については、金子彦二郎氏が、白居易の「三月三十日題慈恩寺」詩の「惆悵春歸留不得、紫藤花下漸黄昏」を、「ぬれつつぞ」の典拠とすることを指摘されたこと³によって一応の結論が出ていると見てよい。

三月三十日題慈恩寺 三月三十日 慈恩寺に題す

慈恩春色今朝盡 慈恩の春色 今朝盡く

盡日徘徊倚寺門 盡日徘徊して 寺門に倚る

惆悵春歸留不得 惆悵す 春歸りて留め得ざるを

紫藤花下漸黄昏 紫藤の花下 漸く黄昏

〔白氏文集〕卷十三・六三二

貴重な春の最後の一日を、長安風流人士が好んで訪れたという慈恩寺の周辺を、逝く春の風景を見とどけるべく朝から徘徊し、ついに「黄昏」を迎えた晩春の究極の感慨を述べている。

この詩と業平の歌に共通するのは「三月三十日」に「惆悵」しつつ「紫藤花」を眺めたということである。

平岡氏は、白居易が春の末日を詩題とする時に「三月尽」と「三月三十日」を使い分け、後者の場合は小の月ではなく大の月であり、一日長く春が留まることを「ありがたしとして喜ぶ」気持ち⁴がこめられている、と述べている。

その貴重な春の最後の日が終わろうとすることを深く愛惜する気持ちを歌うという大きなテーマは、業平歌も白居易詩も同じである。しかしこの「三月三十日題慈恩寺」詩には雨の気配がない。この詩のみでは業平歌の「雨の降りけるに藤の花を折り」て「人につかはし」たことが十分に説明できず、「やよひのつこもりの日」の「藤」に着目して惜春の情を歌ったという点での典拠と言えよう。

「三月三十日題慈恩寺」詩で説明しきれない点について、さらに白居易詩を中心に、業平以前・以後のわが国の和歌・漢詩にも目を向け、改めて検討してみたい。

二 「雨中の花」を折ること

「濡れつつぞしひて折りつる」を白居易詩の受容という点から考える時、「藤花」を折るのではないが、「雨中の花」を「攀折」すること⁵を歌った次の詩が大きな手がかりとなる。

和雨中花

雨中の花に和す

眞宰倒持生殺柄

眞宰 倒に生殺の柄を持し

問物命長人短命

問物は命長く 人は短命なり

松枝上鶴著下龜

松の枝の上の鶴 著の下の龜

千年不死仍無病

千年死せず 仍ほ病無し

人生不得似龜鶴

人生 龜鶴に似るを得ず

少去老來同旦暝

少去り老來たること 旦暝に同じ

何異花開旦暝間

何ぞ異ならん 花の旦暝の間に開き

未落仍遭風雨橫

未だ落ちずして仍りに風雨の横に遭ふに

草得經年菜連月

草は年を経るを得 菜は月を連ね

唯花不與多時節

唯だ花にのみ多くの時節を與へず

一年三百六十日

一年 三百六十日

花能幾日供攀折

花能く幾日か攀折に供する

桃李無言難自訴

桃李言ふこと無ければ自ら訴へ難し

黃鶯解語馮君說

黃鶯語を解すれば君に馮みて説かしむ

鶯雖爲說不分明

鶯は解くことを爲すと雖も分明ならず

葉底枝頭謾饒舌

葉底枝頭 謾りに饒舌

『白氏文集』卷五十二・二二六八

この詩は、元稹から贈られた「雨中花」詩に唱和したものである。

冒頭の四句で、造物主は生殺の権を逆さまに執り、つまらない物に長命を与え人には短い命しか与えないとまず指摘し、続く第五句から第八句で、人間の一生は朝暮の問のように短く、朝暮の間に咲き、風雨に翻弄されながらも散らず持ちこたえている花に等しいと述べる。第九句から第十二句は、野草は何年にもわたり野菜は月を越え

て生き続けるのに対し、花にのみ咲き誇る多くの時間を与えないと対比し、一年三百六十日の間に、花を手折ることができる日が幾日あるうか、と問いかける。最後の四句で、もの言わぬ桃李に代わって鶯が花の嘆きを人に伝えようとするが、やたら饒舌で言うことが明瞭でない、と締めくくる。

この詩の核心は、理不尽なこの世で、「未落仍遭風雨横」（未だ落ちずして仍りに風雨の横に遭ふ）花を、逆境にかるうじて耐えて美質を発揮する人間に重ね、「一年三百六十日、花能幾日供攀折」（一年三百六十日、花能く幾日か攀折に供する）と、反語的に問いかけるところである。そのような白詩の疑問的反語を翻案したのが、業平歌の下三句の「年のうちに春はいくかもあらじ」である。その後「……と思へば」と付けて韻律を整えると同時に、それを理由として、「濡れつつぞ（雨中の藤花を）しひて折りつる」と発想し、倒置法を用いて二句切れで強く言い切った。

白詩の「和雨中花」では雨に濡れた花のしめやかなたたずまいと、人生の春の短さ、老いの到来の速さを愁える心情が基調となっているのに対して、業平歌では雨に濡れながらみずからの意志で藤花を折り取ったことが、「しひて」という副詞や、「……つる」の係り結びでいやがうえにも強調されている。詞書には「やよひのつこもりの日、雨のふりけるに、ふぢの花を折りて人につかはしける」とあるのみで、言外にこめられた思いは、受け手である「人」や、この歌を享受する人、読者である我々の解釈に委ねられている。

小島憲之氏は、「雨中」の語はすでに初唐蘇頌や盛唐王維・杜甫などの詩に二、三の例を見るものの、白詩の詩語「雨中」を島田忠臣

や菅原道真が取り入れ、「雨に濡れた花の艶を美しく描写する」ところに新しい意義がある」と評価し、「長恨歌」の一句、「梨花一枝春帶雨」などとともに、「和雨中花」詩が平安朝の詩人に雨中の花の艶美を認識させるきっかけとなった、と述べている。⁵⁾

ただし、業平と同時代の島田忠臣も、二十年ほど後の菅原道真も、小島氏のいう「雨に濡れた花の艶を美しく描写する」ことに重点を置いており、唐代の詩に顕著な「花下嘆老」、推移する時間へのまなざしや人の命の短さへの嘆きは、彼らの「雨中の花」の詩には見られない。⁶⁾

業平は、承和期において和歌の世界に「三月尽」の惜春の情のみならず「和雨中花」詩によって花下嘆老のテーマをいちはやく取り込み改変した。過ぎていく時間の早さと風雨の猛威のなかで、花を折り取って賞翫できる日は何日もない。だからこそ折り取って春のきわみの美とともに称揚し賞翫しよう。元稹から贈られた「雨中花」に唱和した白居易の「和雨中花」に対して、さらに和歌で唱和したのが、業平の「ぬれつつぞ」の詠であると考えられる。

三 推移する時間と「強」（しひて）

前節の「和雨中花」詩における「少去老來同旦暝」（少去り老來たること旦暝に同じ）に類する、咲く花に人生の春を重ね、過ぎゆく春を愛惜する表現は、白居易の「三月尽」や「三月三十日」を歌う詩には必ずと言っていいほど登場する。

曲江池で水の上に紛々と散る花を見ながら春を送る「送春」（『白

氏文集』巻十・四八七）にも、「人生似行客、兩足無停歩、日日進前程、前程幾多路」（人生は行客に似て、兩足歩を停むる無し、日日前程を進み、前程幾多の路ぞ）と歌う。散る花に逝く春を重ね人生の短さを意識すれば、「爲樂當及時」（樂しみを爲すは當に時に及ぶべし）という「文選」『古詩十九首 其十五』の発想につながる。

短歌行

瞳瞳太陽如火色 上行千里下一刻 出爲白晝入爲夜 圓轉如珠住不得 住不得可奈何 爲君舉酒歌短歌 歌聲苦詞亦苦 四座少年君聽取 今夕未竟明旦催 秋風纔往春風回 人無根帶時不駐 朱顏白日相隳退 勸君且強笑一面 勸君復強飲一杯 人生不得長歡樂 年少須臾老到來	瞳瞳たる太陽 火色の如し 上り行くこと千里 下ること一刻 出づれば白晝と爲り 入れば夜と爲る 圓轉すること珠のごとく 住むるを得ず 住むるを得ず 奈何すべき 君が爲に酒を舉げて短歌を歌はん 歌聲苦しく 詞も亦た苦し 四座の少年 君 聽取せよ 今夕未だ竟らざるに 明旦催し 秋風纔かに往き 春風回る 人に根帶無く 時駐まらず 朱顏 白日 相隳ひて頽る 君に勸む 且く強ひて笑ふこと一面 君に勸む 復た強ひて飲むこと一杯 人生長く歡樂するを得ず 年少は須臾にして老は到來せん
--	--

（『白氏文集』巻十一・五七八・感傷）

燃える火のような太陽は、転がる珠のように天空を運行し、時は

一刻も留まってはくれない。そこで、君のために酒杯を上げて「短歌行」を歌おう。歌声も歌詞も苦しげだが満座の少年達よ、じつくりと聴いておくれ。今夕が終わらぬうちに翌朝が来る、秋風が去るとすぐに春風が吹く。人も月日も過ぎ去る。だから君たちよ、つとめて笑ってごらん、つとめて酒を飲んでごらん、人生は長く歓楽を尽くすことはできない、老いがすぐにやって来るのだから。

「短歌行」とは魏晉の宮廷音楽の楽曲名の一つで、唐代には魏晉のそれは減びていたが、それらを詩題とした楽府詩は作られていた。「和雨中花」詩の「少去老來同旦冥」や「送春」詩の「唯有老到來、人間無避處」と同じく、「短歌行」においても白居易は時の推移と老いの到来の速やかさを歌い、それゆえ「勸君且強笑一面、勸君復強飲一杯」（君に勸む且く強ひて笑ふこと一面 君に勸む復た強ひて飲むこと一杯）と、積極的に生を享受することを勧める。ここで用いられている「強」は、業平歌の「しひて」にきわめて近い。動詞「強ふ」は『万葉集』にも用いられていたが、副詞「しひて」は平安時代以降の歌に現れ、業平の「しひて」はその最も早い時期の例である。

否といへど強ふる志斐のが強ひ語り（強流志斐能我強語）このころ聞かずに朕恋ひにけり（万葉集・卷三・二二六）

否といはば強ひめや我が背（將強哉吾背）昔の根の思ひ乱れて恋ひつつもあらむ（万葉集・卷四・六七九）

椽の袷の衣裏にせば我れ強ひめやも君が来まさぬ

（万葉集・卷十二・二九六五）

しひてゆく人をとどめむ桜花いづれを道とまどふまで散れ

（古今集・四〇三）

わびぬればしひて忘れむと思へども夢といふものぞ人だのめなる（寛平御時后宮歌合、新撰万葉集、古今集・五六九）
寝られぬをしひてわが寝る春の夜の夢をうつつになすよしもがな（後撰集・七六）

吹く風の誘ふものとは知りながら散りぬる花のしひて恋しき名にし負へばしひてたのまむ女郎花花の心は秋はうくとも（後撰集・九一）

待てといふに留まらぬものと知りながらしひてぞ惜しき春の別れは（寛平御時后宮歌合、新撰万葉集、新古今集・一七二）
そして『伊勢物語』八十三段にも「しひて」は用いられている。

正月に拝みたてまつらむとて、小野にまうでたるに、比叡の山の麓なれば、雪いと高し。しひて御室にまうでて拝みたてまつるに、つれづれと、いとものがなしくておはしましたれば…

「寛平御時后宮歌合」や「新撰万葉集」、「古今集」や「後撰集」に「しひて」を用いた歌が集中的に現れており、『古今集』四〇三番歌や「後撰集」七六・三四三番歌には、「しひて」以外にも業平の歌を受容した痕跡が認められる。

竹岡正夫氏は業平歌の「しひて」を次のように解説する。

動詞「強ふ」からできた副詞。相手の気持ちにさからって、あるいは真実・道理に従わないであえて、という意。こうしている間にも春は過ぎ去ってしまう、ちょうど雨であったが、それでも春が過ぎ去ってしまうのは困るので、雨に濡れぬようにす

るのが道理だがその道理に反して雨にぬれて折ったのである。

〔古今和歌集全評釈〕

『万葉集』における「強ふる」や「強ひ語り」の「強ふ」は竹岡氏の言う「相手の気持ちにさからって」の意であるが、『古今集』以降の「しひて」は、『大漢和辞典』に「強、勤也」（爾雅、釋詁）、「強、勉也、或作疆」（集韻）とある、「つとめる」の意の「強」の副詞的な用法であると考ええる。

白居易は「勤」や「勉」に当たる「強」を、みずからを励ます場合や、そうせよと相手に勧める場合に多く用いている。

「馬陸強出贈同座」（『白氏文集』二四五九）では「強出非他意、東風落盡梅」（強ひて出づるは他の意に非ず、東風梅を落盡すればなり）と、馬から落ちて足腰を痛めた時に、つとめて出かけるのは、ほかでもないぐずぐずしていると春風が梅の花を吹き散らしてしまうからだ、と外出の意図を一座の人々に語っている。

三月三十日に春を送る感慨を詩に託して、遠く離れた任地にいる元稹に答えた次の詩にも「つとめて」の意の「強」が用いられている。

和三月三十日四十韻

送春君何在 春を送りて君何くにか在る

君在山陰署 君は山陰の署に在り

憶我蘇杭時 我が蘇杭の時を憶ふに

春遊亦多處 春遊 亦た處多し

……

手經攀桂馥 手は桂を攀づるを経て馥しく

齒爲嘗梅楚 齒は梅を嘗むるが爲に楚なり
坐併船脚敲 坐併せて船脚敲ち
行多馬路阻 行くこと多くして馬路阻む

……

莫空文舉酒 文舉が酒を空しくする莫かれ

強下何曾筇 強ひて何曾が筇を下せ

江上易優游 江上には優游し易く

城中多毀譽 城中には毀譽多し

……

兩心苦相憶 兩心苦ろに相憶ひ

兩口遙相語 兩口遙かに相語る

最恨七年春 最も恨む七年の春

春來各一處 春來りて各一處なるを

〔白氏文集〕二二五七・格詩

春を送る日に君はどこにいるのか、と語りかけ、浙東省山陰にいた元稹からの詩に応じて、かつて自分が蘇州・杭州にいた頃の春の行楽の様子を述べる。引用を省略したが早春からの自然の変化を描写した後、木屋を手折り梅の実を味わい、船遊びをしたり馬で遠出をしたりと往時を語る。そして自分が蘇州を去ってから新たにできた友人たちと、かの文舉や何曾のようにつとめて酒を飲み美味いものに箸を付けて楽しめ、と勧める。その一方で江南では遊びがちになり、人から非難を受けやすいと戒めもする。最後に、離れ離れでも互いに詩をやりとりしてきた歳月を振り返り、異なる場所で春を送るようになって七年、これが最も恨めしい、と一首を結んでいる。

詩や手紙のやりとりをして心は通い合っている、実際は離れ離れの状態で過ぎゆく春を送る、その憂愁が業平歌に通じている。彼ら自身の人生の春も過ぎ去ろうとしているのかもしれない。

白居易は、時が一刻もとどまることなく過ぎ去ることを意識するがゆえに歎を尽くせと勧めるが、その楽しみ方は極端な享楽に走るのではなく、不本意な状況の下でも意識的にみずから気を引き立て、「強出非他意、東風落盡梅」とささやかな楽しみを求め行動する。

また「短歌行」の「勸君且強笑一面、勸君復強飲一杯」や、元稹への「強下何曾飭」の呼びかけのように、宴飲して生を楽しむと詩を贈る相手にも呼びかける。「ぬれつつぞしひて折りつる」は、白居易の一連の詩からの呼びかけに應える業平の返事であり、みずからを鼓舞し、生きる姿勢を確認する言葉でもあったのだろう。

四 花や木を「手折り」贈ること

続いて詞書にある「ふちの花を折りて人につかはしける」について考察したい。

花や黄葉を「手折る」こと、「かざす」こと、そして君と仰ぐ人や親しい女性・友人に「贈る」ことは、奈良時代末期からすでに行われていた。

手折らずて散りなば惜しと我が思ひし秋の黄葉をかざしつるかも
(巻八・一五八一・橘奈良麻呂)

めづらしき人に見せむともみち葉を手折りそ我が来し雨の降らくに
(巻八・一五八二・橘奈良麻呂)

もみち葉を散らすしぐれに濡れて来てて君が黄葉をかざしつるかも
(巻八・一五八三・久米女王)

めづらしと我が思ふ君は秋山の初もみち葉に似てこそありけれ
(巻八・一五八四・長忌寸娘)

もみち葉を散らまく惜しみ手折り来てこよひかざしつ何をか思はむ
(巻八・一五八六・県大養持男)

奈良山をにははす黄葉手折り来てこよひかざしつ散らば散るとも
(巻八・一五八八・三手代人名)

露霜にあへる黄葉を手折り来て妹はかざしつ後は散るとも

もみち葉の過ぎまく惜しみ思ふどち遊ぶこよひは明けずもあらぬか
(巻八・一五八九・秦許遍麻呂)

これらには「冬十月十七日に、右大臣橘卿の旧宅に集ひて宴飲せるなり」という左注があり、暦の上では初冬に詠まれたが、「秋雑歌」に分類されている。天平十年（七三八年）当時十七、八歳の橘奈良麻呂が主催した宴に、「雨の降らくに」、「しぐれに濡れて」、「黄葉」を手にか持らは参集した。「手折る」とは、「同じ心に風流を解する人々と共に紅葉を折ってかざし、宴を催すことをさす」と言う。「尽日」をテーマとする詩は中国においてもまだ生まれていないが（白居易は七七二年誕生、八四六年没）、「めづらしと我が思ふ君」を中心に、心を寄せる人々が逝く秋を惜しみ、夜を徹して楽しむ文化が天平時代のわが国に存在したことを示している。

「かざし」や「うず」は、季節の草木や花を身に付けることによって、その植物の生命力を身に受ける感覚呪術として古代から継承さ

れてきた。

命の 全けむ人は 疊薦 平群の山の
熊白禰が葉を うずに挿せ その子

(古事記・景行天皇)

時代が降るにつれ祝的側面は次第に薄れていき、奈良時代末期には献上する相手の長寿を祈る挨拶のしるしとなり、髪に挿し飾りとする美的側面が強くなっていった。「手折り」、「かざす」歌は『万葉集』では特定の巻に偏っており、その多くが家持およびその周辺の人々である。これは諸民族に共通する感染祝術的発想が古層にあり、当時の先進国の漢詩文にも多く歌われているので、それらに倣って花を手折り、愛する人に贈り、挿頭にして、色や香りを楽しみながら異国の文化をも享受したのであらう。

春日野の藤は散りにて何をかもみ狩の人の折りてかざさむ

(卷十・一九七四・雑歌)

多祜の浦の底さへにはふ藤波をかざして行かむ見ぬ人のため

(卷一九・四二〇〇・内蔵繩麻呂)

藤の花も挿頭にされていた。一九七四は「み狩り」天皇の遊獵(五
月五日の藥狩)の時に藤の花が散り過ぎてしまっていることを惜し
む歌であり、四二〇〇は越中の国府から布施の水海に遊覧に出かけ
た家持が、水面に影を映す藤の花の美しさを讃えた歌である。

草木を攀折して贈ることは、奈良朝の官人たちも好んで読んだ『文
選』に数多く歌われている。

古詩十九首 其の六

涉江采芙蓉 江を涉りて芙蓉を采る

蘭澤多芳草 蘭澤には芳草多し

采之欲遺誰

所思在遠道

還顧望舊鄉

長路漫浩浩

同心而離居

憂傷以終老

之を采りて誰にか遺らんと欲する

思ふ所は遠道に在り

還り顧みて舊郷を望めば

長き路は漫として浩浩たり

心を同じくして離れ居む

憂ひ傷んで以て老を終へんとす

(文選) 雜詩 第二十九卷)

旅の途中の水辺で美しい蓮や香り草を取って誰かに贈ろうと思う
が、贈りたい懐かしい人は遠く離れた故郷にすることを思い知る。
互いに慕いながら、悲嘆のうちに年老いてゆくことを憂える。

第三句の「采之欲遺誰」には「親愛する人に芳草を贈って、恩情
を結ぶ風習が、古代人の間にあったらしい。朱自清は『毛詩』や『楚
辭』から例証を挙げてそのことを論じている」と注がある。また「所
思」について「妻または親友をいう」として、『楚辭』「九歌・山鬼」
の「芳馨を折りて、思ふ所に遺らん」を引いている。

香りのよい花を折り取って「思ふ所」に贈る詩は他にもある。

古詩十九首 其の九

庭中有奇樹

綠葉發華滋

攀條折其榮

將以遺所思

馨香盈懷袖

路遠莫致之

此物何足貢

庭中に奇樹有り

綠葉に華滋を發さ

條を攀ちて其の榮なるを折る

將に以て思ふ所に遺らんとす

馨香は懷袖に盈つれども

路の遠くして之を致すによし莫し

此の物 何ぞ貢ぐるに足らん

但感別經時

但だ別れて時を経たるに感ずればなり

〔文選〕 雜詩 第二十九卷

「古詩十九首」の「其の六」が旅先にあつて故郷に残した人を思うのに対して、「其の九」は家にある人が、「路遠」の人にわが家の庭に咲いた珍しい花を、「條を攀ちて」贈ろうとして、道の遠さと、不在の時の長さを痛感する詩である。

『文選』「古詩十九首」の「芳草」や「華滋」を「采る」、「攀づ」といった行為は、「楚辭」にも見える。「離騷」には、「美人」（君王）に尽くそうとして顧みられない靈均が、香草を身にまとい日夜身を潔く保ち、君に召される日待つことが、次のように歌われる。

朝搴阰之木蘭兮

夕攬洲之宿莽

日月忽其不淹兮

春與秋其代序

惟草木之零落兮

恐美人之遲暮

「木蘭」や「秋蘭」は「古詩十九首」にいう「芳草」の一種である。

また、湘君と湘夫人が「杜若」を贈り合う詩もある。

捐余玦兮江中

遺余佩兮澧浦

采芳洲兮杜若

將以遺兮下女

時不可兮再得

聊逍遙兮容與

〔楚辭〕 九歌（三） 湘君

捐余玦兮江中

遺余櫟兮澧浦

搴汀洲兮杜若

將以遺兮遠者

時不可兮驟得

聊逍遙兮容與

〔楚辭〕 九歌（四） 湘夫人

これら『楚辭』や『文選』の詩において、男女の間で芳花を「遺」（おくる）のは、相手に対する愛情のしるしであるが、儒教的に見れば君臣関係における忠節の表明である。業平には、菊の花を移し植えて、志を同じくする「人」におくる歌もある^⑩。

人の前栽に菊に結び付けて植えける歌

植えし植えば秋なき時や咲かざらん花こそ散らめ根さへ枯れめ

や
〔古今集〕 秋下・二六八

『楚辭』や『文選』の「遺」は、花木や芳草を「おくる」（贈る・送る）時に用いられ、「ふちの花を折りて人につかはしける」との「つかはす」に当たる^⑪。『古今集』の詞書の「つかはす」が、『楚辭』や『文選』の用字を意識していたかどうかはわからない。しかし古くからあった「かざし」の習俗は、花木を手折って敬愛する人に贈るといふ六朝・唐風の新たな趣向として平安時代にも継承され、業平は「やよひのつこもり」に、会えない状態にある、心をわかり合える「人」におくったと考えられる。

中国の漢詩文の伝統や、それらを受けた『万葉集』の家持らに倣っ

て、藤の花の色と香を愛で、その美しさを「高潔の士」である相手と共有し、相手に敬愛の情、親愛の情を伝え、惜春の情を分かち合う、それがこの一首にこめた業平の思いであった。

五 芳草としての「藤」と諷諭詩「紫藤」

前節で「藤の花の色と香りの美しさを愛で」と述べたが、和歌において藤花の香りを詠んだ歌はきわめて少ない。

蘆垣のほかとはみれど藤の花にほひは我をへだてざりける

（金葉集・巻一・八八・内大臣家越後）

八代集のなかで藤の花の香りを詠んだ唯一の歌である。

『万葉集』の藤は、時鳥とともに初夏の景物として詠まれることが多く、花が咲いたあるいは散ったことで、夏の到来や盛夏への推移を実感する花であった。この時代、和歌において花は視覚的な美しさが詠まれ、「にほふ」という語も視覚的な美を表していた。「香り」についても用いられるのは奈良朝末期ごろからである。

橘のにはへる香かもほととぎすなく夜の雨にうつろひぬらむ

（巻十七・三九一六・大伴家持）

梅の花香をかぐはしみ遠けども心もしのに君をしそ思ふ

（巻二十・四五〇〇・市原王）

右の二首は確実に「香」を歌っているが、「梅」と「橘」の花の香に限られ、「懷風藻」が広く花の香りを歌うのと対照的である。

しかし、次の歌のような表記の「染む」は、嗅覚的に「深くしみ入る」意に解釈した方がよいと思われる。

引き攀ちて折らば散るべみ梅の花袖に扱入れつ染まば染むとも

（染者雖染）

（巻八・一六四四・三野石守）

：はろはろに 鳴くほととぎす 立ち潜くと 羽触れに散らす
藤波の 花なつかしき 引き攀ちて 袖に扱入れつ染まば染む

とも（染婆染等母）

（巻十九・四一九二・大伴家持）

すると奈良朝末期には「梅」や「橘」だけでなく、「藤」も芳香を和歌に歌われていることになる。業平が手折った藤花もそれを継承して、視覚的な美しさだけでなくかぐわしい香を持つ「芳草」として詠まれ、市原王の「香をかぐはしみ遠けども心もしのに君をしそ思ふ」と同じ心で、「人」に贈られたと考えられる。

『万葉集』において「橘」と「藤」は初夏の花であったが、白居易の「惆悵春歸留不得、紫藤花下漸黃昏」などの詩句の伝来以降、「藤」は晩春の花となる。「しひて折りつる」は、そのままではやがて雨に濡れ色褪せ萎れてしまうであろう藤花を、最も美しい状態のまま手元で賞翫するためになされた、「逝く春」を留め置く行為であった。

一方、同時代の和製漢詩の「藤花」の詠じ方は大きく異なる。忠臣は「大相府東庭貯水成小池。小池種一紫藤。至於今春初發花房。酌於花下翫以賦之。應教」（大相府の東庭に水を貯め小池を成す。小池に一紫藤を種う。今春に至りて初めて花房を發く。花下に酌し、翫びて以て之を賦す。應教）と題する詩に、次のように言う。

重華累葉種相依

重華累葉 種は相依る

池上新開映晚暉

池上に新たに開き 晩暉に映ず

料量紫茸花下盡

料量す 紫茸は花の下に盡くるも

家香更作國香飛

家香は更に國香と作りて飛ばん

一種垂藤數尺斜

一種の垂藤 數尺斜めなり

雖新雖舊是同家

新と雖も 舊と雖も是れ同家

久來用意依芳蔭

久來 意を用ゐて芳蔭に依る

不向人間趁百花

人間に向かひて百花を趁はず

〔田氏家集〕 一三一 (a) — (b) 〔

大相国藤原基経の邸宅の東庭に作った池のほとりに植えた藤、それが今春初めて花をつけた。重なり合つた花房や葉が、夕暮れの光に映える。「重華累葉」は、代々優れた人物を輩出した藤原氏一族の繁栄を讚美する喩である。第四句の「家香更作國香飛」は、藤原家の「藤」の花の香りが、「一族の香」から「国を代表する香」へと飛躍するであろうと、さらなる繁栄を预祝する。

終わりの二句「久來用意依芳蔭、不向人間趁百花」は、これまでかくわしい藤の花の蔭、藤氏の庇護の下で過してきたが、これからも俗世間で百花を追うようなことはせず、藤氏を頼みとしていきたい、と花に託して藤原氏に恩顧を頼んでいる。

道真にも「藤」を詠んだ詩がある。

紫藤

高閣藤花次第開

高閣の藤の花は次第に開く

疑看紫綬向風廻

疑ひて看る 紫綬の風に向かひ廻れるかと

榮華得地長應賞

榮ゆる華は地を得て長く賞すべし

不放遊人任折來

遊人の任に折來りなむことを放さず

〔菅家文章〕 卷五・三九五

高殿に咲く藤の花房が、高官の身に帯びる紫綬（紫色の印のひも）のように風に揺れている。藤の花が所を得て、榮耀榮華に咲き誇る

姿は長く人々に賞賛されるだろう。遊覧する人がこの花を気ままに折り取ることは許されない、という内容である。第二句「疑看紫綬向風廻」の「紫綬」は、当時右大臣であつた藤原長世や中納言であつた藤原時平を暗に指すとみることでもでき、第三句の「榮華得地長應賞」とあわせて、藤原氏の榮華を讃えている。第四句では、咲きはこる花を誰も折ることは許されない、と藤氏の卓越した繁栄を讚美するが、裏返せば専横を極める藤原氏を批判している。

もちろん道真は、次に引用する白居易の諷諭詩「紫藤」を熟知したうえで詠んでいる。

紫藤

紫藤

藤花紫蒙茸

藤花は紫にして蒙茸

藤葉青扶疎

藤葉は青くして扶疎たり

誰謂好顔色

誰か謂ふ 好顔色と

而爲害有餘

而も害を爲すこと餘有り

下如蛇屈盤

下つては蛇の屈盤するがごとく

上若繩縈紆

上りては繩の縈紆するがごとし

可憐中間樹

憐むべし 中間の樹

束縛成枯株

束縛せられて枯株と爲る

柔蔓不自勝

柔蔓自らは勝へず

嫋嫋挂空虚

嫋嫋として空虚に挂る

豈知纏樹木

豈に知らんや 樹木を纏ひて

千夫力不如

千夫の力にも如かざるを

先柔後爲害

先には柔かにして 後には害を爲すこと

有似諛佞徒

諛佞の徒に似たる有り

附著君權勢

君迷不肯誅

又如妖婦人

網繆蠱其夫

奇邪壞人室

夫惑不能除

寄言邦與家

所慎在其初

毫末不早辨

滋蔓信難圖

願以爲藤戒

銘之於座隅

君の權勢に附著するも

君迷ひて肯へて誅せず

又妖婦人の如く

網繆して其の夫を蠱し

奇邪 人の室を壊るも

夫惑ひて除く能はず

言を寄す邦と家と

慎む所は其の初めに在り

毫末も早く辨ぜずんば

滋蔓信に圖り難し

願はくは藤を以て戒めと爲し

之を座隅に銘せんことを

『白氏文集』卷一・三八・諷諭

美しい紫の花房を長く垂らし、青々と葉を茂らせる藤、その蔓は樹木にからみつき、からみつかれた樹木は皆枯死してしまふ。初めは柔らかで後には害をなすさまは、主君に阿諛追従する佞臣や、夫をまどわす妖婦に似ている、と藤を借り佞臣妖婦の害を述べている。

白居易の「紫藤」をわが国の当時の状況に当てはめると、花や葉の繁茂するさまや「諛佞徒」や「妖婦」の弊は、娘を後宮に入れた摂関政治を敷き、権力を振るう藤原北家の栄華に重なるだろう。

道真の「紫藤」は、第一句から三句までは藤氏を讚美するように見える。しかし当時の知識人は、詩の題「紫藤」から白居易の「紫藤」の詩句を想起し、原典の厳しい諷諭を重ねたと考えられる。

道真の「紫藤」の第四句「不放遊人任折來」（任に折來りなむこ

とを放さず）は、業平の「しひてをりつる」を受けた表現と読めなくはない。道真が白居易の「紫藤」のみならず、業平の藤花の詠を踏まえて「紫藤」を作ったとすれば、道真は業平歌の背後に白居易の「紫藤」を連想し、業平歌の冒頭二句に藤原氏にあらがう意志を見ていたことになる。しかし道真の時代には、もはや「不放遊人任折來」（任に折來りなむことを放さず）と言わざるをえないほど北家の権力は強くなっており、これが精一杯の風刺であつた。

島田忠臣の和製漢詩よりも少し遅れて、和歌においても藤の花に託して藤原氏を讚美する詠が登場する。

わがやどのかげとも頼む藤の花立ち寄り来とも波に折らるな

（後撰集・卷三・一二〇・よみ人しらず）

限りなき名におふ藤の花なればそこひも知らぬ色の深さか

（後撰集・卷三・一二五・三条右大臣）

棹させど深さも知らぬふちなれば色をば人も知らじと思ふ

（後撰集・卷三・一二七・紀貫之）

一盲目は、漢詩の「芳蔭」などを受け、藤花に自らが恩顧を頼む藤氏を重ねてその繁栄を願う歌であり、後の二首は「やよひの下十日ばかり」に藤原兼輔邸に出向いた藤原定方と紀貫之が、兼輔の家を最高の名門「限りなき名におふ藤の花」、「深さも知らぬふち」と称えた歌である。『後撰集』以降、こうした藤原氏を讚美する詠歌が増えて行く。このような時代の風潮の中で『古今集』の業平の藤花の詠は改作され、「伊勢物語」八十段の「おとろへたる家に、藤の花を植ゑたる人」が「人のもとへ折りてたてまつらす」話、すなわち零落したある男が、自宅の藤の花を権門藤原氏に献上し、官

位昇進を乞うたストーリーに作り替えられたと思われる。

先に見た道真の「紫藤」の第四句「不放遊人任折來」が、業平の「しひて折りつる」を踏まえ、「折來」に「楚辞」や「文選」以来の「芳草を折りつつて贈る」意が込められているとすれば、道真は藤原氏を風刺するとともに、藤氏に抵抗する「高潔の士」がもはや同時代に存在しないことを嘆いたともいえよう。

おわりに

『後撰集』の藤原雅正（藤原兼輔の息）と貫之の贈答は、白居易の「三月尽」の詩群やそれを取り入れた業平の和歌が、当時どのように定着していたかを知るうえで興味深い。

常にまうで来かよひける所に、障ること侍りて、ひさしく

まで来逢はずして年かへりにけり。あくる春、やよひのつ

ごもりにつかはしける

藤原雅正

君来ずて年は暮れにきたちかへり春さへ今日になりにけるかな
ともにこそ花をも見めと待つ人の来ぬものゆゑに惜しき春かな

返し

つらゆき

君にだに間はれでふれば藤の花たそがれ時も知らずぞありける

八重葎心の内に深ければ花見にゆかむいでたちもせず

春下の巻の一三七から一四〇の歌であるが、木藤智子氏は「両者の贈答は季節の風物を愛し、ともに賞でる「友」を求める気持ちに触発されて詠まれ、「みやび」を解する詩友との間で展開された文人詩を継承するものである」と論じている。¹⁶ 白居易が元稹とともに

春の最後の日の景物を愛惜できない寂しさを嘆いた「三月尽」の情趣は、業平経由でこのように浸透していた。

業平は『白氏文集』の「三月三十日題慈恩寺」、「和雨中花」、「短歌行」などの詩を重ねあわせて「濡れつつを」の和歌を創作した。春の最後の日に「芳草」を「攀折」して「思ふ所」に贈り、「強」

いて歓楽を尽くし、推移する時のなかで大切なものを共有しようとした。そのような前提で一首を解釈すると次のようになるだろう。

雨に濡れながらあえて藤の花を手折った。一年のうち藤の最も美しい色や香りを楽しめる日は何日もないだろうから。だからこそあなたに贈る。離れていても白詩の「三月尽」や「和雨中花」の情趣をとものに分かち合い、春の最後の日をとものに愛惜しようではないか。

二つ目は「しひて折りつる」に「紫藤」の喩をこめ、藤氏にあらがう意志を表わすという見方である。その場合は次のようになろう。

雨の中であえて藤の花を手折った。専横を極める藤原氏のせいであつた不遇な状態にあるが、気持ちのうへではつとめて彼らに媚びへつらわれないつもりだ。花が美しく咲く春の日は一年のうち何日もないように、短い人の世で春を謳歌できる日はそう多くはないだろうから。

三つ目は「雨」に「ぬれつつ」が「雨露」（恩沢）の意味を含み、「紫の藤」は藤原氏の繁栄を表すと見た解釈である。

あなたさまの恩恵に浴そうと、貴家繁栄の象徴である藤の花を手折り、思い切つてご挨拶申し上げます。一年の内に花の美しい春の日が何日もないように、短い私の一生のなかで貴家の繁栄に連なることのできる日はどれほどもないだろうから。

以上三つの解釈が可能であるが、本稿の論証過程からすれば、第

一の解釈が創作時の思いであろう。業平よりも後に、藤原摂関家の権限がさらに強まるなかで、第二や第三の解釈が生まれ、『古今集』の詞書の「つかはす」を「奉らす」に換え、積極的に狎官の意志を示す『伊勢物語』八十段のストーリーが作られたと考えられる。

「ぬれつつぞしひて折りつる」の歌は、業平が離れた状態にある心ある友と、過ぎゆく春の情趣を藤花をなだちにして愛惜しようと呼びかけたものであり、それは時空を超えた白居易との唱和でもあった。そのままでは時の推移の中で消えゆく美しいものを、言葉の世界に永く留めるために、業平は白居易をはじめとする詩歌をふんだんに典拠として用い、「ぬれつつぞしひて折りつる」の和歌を創作したと考える。

【注】

- (1) 平岡竹夫「三月尽―白氏歳時記―」（『白居易―生涯と歳時記―』一九九八、朋友書店）、小島憲之「四季語を通して―『尽日』の誕生」（『国風暗黒時代の文学 補篇』二〇〇二、塙書房）、渡辺秀夫『伊勢物語』における漢詩文受容」（『平安文学と漢文学』一九九一、勉誠社）などによる。
- (2) 拙稿「在原行平・在原業平における白居易詩の受容―『古今集』布引の滝の歌をめぐる―」（『言語表現研究』第十九号・二〇〇三・三）による。
- (3) 金子彦二郎『増補 平安時代文学と白氏文集―句題和歌・千載歌句研究篇―』（一九七七覆刻版、芸林社）による。
- (4) 平岡竹夫前掲書による。
- (5) 小島憲之『新撰万葉集』の詩と歌」（『古今集以前』一九七六、塙書房）による。
- (6) 「雨に濡れた花の艶」を詠じた和製漢詩として、島田忠臣の「賦雨中櫻花」や、道真の「早春侍内宴、同賦雨中花」、「上巳日、對雨翫花」などがある。白居易の「和雨中花」に基づいた業平以外の和歌として藤原興風の「いたづらに過ぐる月日は思ほえて花見て暮らす春ぞすくなき」（古今集・賀・三五二）がある。和製漢詩と和歌とでは詠じる観点が大きく異なっている。
- (7) 管見によれば、白居易は副詞「しひて」の意の「強」を、三十三編の詩に三十六用いている。
- (8) 新日本古典文学全集『万葉集②』一五八一番歌の頭注による。
- (9) 花房英樹『文選 詩騷編 四』（全釈漢文大系二九、一九七四・一二、集英社）の「古詩十九首」の注による。
- (10) 拙稿「白詩受容の観点から見た業平の菊歌の詠」（『言語表現研究』第十三号、一九九七・三）による。
- (11) 『古今集』において「つかはしける」という詞書きは、「越国へまかりける人に、よみてつかはしける」（三八三）、「人に逢ひて後に、よみてつかはしける」（六四四）など三十の用例があり、主として空間的、心理的に距離のある相手に用いられている。
- (12) 『懷風藻』の長屋王の「元旦宴 應詔」における「柳絲歌曲入、蘭香染舞巾」（柳絲歌曲に入り、蘭香舞巾に染む）の「染」は、「香りが染みこむ」意で用いられている。『万葉集』の「染まば染むとも」の「染」も、花を「袖に扱入れ」ることについて言うので、

「香りが袖に浸透して移る」意であると考えられる。

- (13) 三木雅博氏は、「久來用意依芳蔭」は、『伊勢物語』百一段の「咲く花の下にかくる人を多みありしにまさる藤のかげかも」と詠み、その意図を問われ「太政大臣の栄華のさかりにみまそかりて、藤氏のことには栄ゆるを思ひて詠める」と説明したぐだりに通じるものがあることを指摘している（『田氏家集注』）。

- (14) 道真の「紫藤」「藤花次第開」「栄華得地」が白詩によることを金子彦二郎氏が『増補 平安時代文学と白氏文集』道真の文学研究篇第二冊（一九七八、芸林社）で指摘している。「紫綬」の喩は、川口久雄校注『菅家文章』『紫藤』の頭注による。

- (15) 安田徳子氏は「藤詠考」において、「藤を詠じた歌は『後撰集』から『金葉集』にかけて最も多く入集しているが、この時期は藤原氏全盛時代と一致しており、藤の花に藤原氏の栄華を重ねて見る意識があったのであろう」（『古今集と漢文学 和漢比較文学叢書11』汲古書院、一九九二）と述べている。

- (16) 本藤紀子「『後撰集』と漢文学―文人歌における風雅と交友を中心に」（『古今集と漢文学 和漢比較文学叢書11』汲古書院、一九九二）による。

◇本文中に引用した詩歌ならびに作品番号と訓読は以下によった。

○漢詩

・『白氏文集歌詩索引』（底本は舊影印那波本）（平岡竹夫・今井清編、同朋社）を基本とし、必要に応じて『続国訳漢文大成 白楽天全詩集』（底本は王立命の編訂した『白香山詩集』佐久節訳注、

一九八九・日本図書図書館センター）、新釈漢文大系『白氏文集』（明治書院）を勘案した。

・『文選（詩騷編）』四）全釈漢文大系29（花房英樹、一九七四、集英社）

・『楚辭』新釈漢文大系34（星川清孝、一九九三、明治書院）

・『懷風藻 文華秀麗集 本朝文粹』（小島憲之、一九六四、岩波書店）

・『田氏家集注』（小島憲之監修、卷之上・一九九一、卷之下・一九九四、和泉書院）

・『菅家文章 菅家後集』（川口久雄、日本古典文学大系72、一九六六、岩波書店）

○和歌

・『万葉集』新編日本古典文学全集（小島憲之・木下正俊・東野治之校注、一九九四、小学館）

・『古今和歌集』新編古典文学全集（小沢政夫・松田成穂校注、一九八九、小学館）を基本とし、必要に応じて『古今和歌集』新

日本古典文学大系（小島憲之・新井榮蔵校注、一九八九、岩波書店）を勘案した。

・『後撰和歌集』新日本古典文学大系6（片桐洋一、一九九〇、小学館）

・『補訂 古今和歌集全評釈』竹岡正夫（一九八一、石文書院）

・『新訂版 古今和歌集評釈』窪田空穂（一九六〇、東京堂出版）

（くば みずよ・西宮市立西宮高等学校）